

Title	摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科開設3年間の臨床統計
Author(s)	杉山, 哲也; 大久保, 真衣; 原, 睦喜; 大平, 真理子; 石田, 瞭
Journal	歯科学報, 111(4): 438-438
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/2588">http://hdl.handle.net/10130/2588</a>
Right	

## 示 説

### No.27: 小児口腔より検出された乳酸桿菌属細菌の構成と小児齲蝕発生への影響に関する考察

高橋直子, 桜井敦朗, 本間宏実, 新谷誠康 (東歯大・小児歯)

**目的:** これまで齲蝕の原因菌は、歯面定着性、酸産生能の高さからミュータンスレンサ球菌が主力であると考えられてきた。同様に高い酸産生能をもつ *Lactobacillus* 属 (乳酸桿菌) が齲蝕形成の主役であると考えられた時期もあったが、歯面定着性が低く、今では齲蝕の原因菌としての研究は少ない。しかし、哺乳齲蝕のような特徴的な齲蝕形態を考えると、すべてにミュータンスレンサ球菌を中心とした齲蝕形成メカニズムが当てはまるのかどうかは疑問である。本研究では低年齢の患児から採取した歯面プラークから乳酸桿菌属細菌を単離、菌種を同定して、乳酸桿菌種の齲蝕発生への関与の再検討を試みた。

**方法:** 東京歯科大学千葉病院小児歯科に来院した2~6歳の患児に対し、保護者に説明し同意書に署名をいただいた上で、歯面プラークを試料として採取した。試料はショ糖添加培地にて培養後、菌液を Rogosa SL 寒天培地に播種して1週間培養し、得られたコロニーを単離保存した。また得られたコロニーは細菌ゲノムの抽出を行い、16S rRNA をターゲットにした遺伝子シークエンスを行って菌種の同定を試み、各試料から得られた乳酸桿菌属細菌の構成を解析した。また、試料を採取した患児の保護者

にアンケートを行い、家族構成と齲蝕罹患状況、間食を中心とする生活習慣、刷牙習慣、口腔内清掃状態などを記録した。乳酸桿菌属細菌の構成と記録との照合を行い、細菌構成と齲蝕罹患状況の相関性、細菌構成に影響を与える生活環境を検討した。

**成績および考察:** 乳酸桿菌は歯面付着性が低いとされているが、本研究では歯面から得られた試料をまずショ糖含有培地で培養することで、採取時に歯面に付着しており、かつ耐酸性の高い乳酸桿菌の検出を試みた。得た試料の約80%について、本法で乳酸桿菌属細菌と考えられるコロニーが得られた。シークエンスによって菌種の同定を試みた結果、ほとんどのコロニーは *L. salivarius*, *L. casei* のいずれかと推定され、その他の乳酸桿菌種はわずか1つの試料から検出されたのみであった。各試料から得られた乳酸桿菌のコロニー数は、齲蝕のある患児から得た試料では有意に多かった。本研究で検出された細菌が歯面に定着していたものかということには更に検討が必要だが、この結果は唾液等から乳酸桿菌の検出を試み、多数種の菌種が同定されたほかの報告とは大きく異なっていることからこの2菌種の小児齲蝕発生への関与を示唆している。

### No.28: 摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科開設3年間の臨床統計

杉山哲也<sup>1)</sup>, 大久保真衣<sup>1)</sup>, 原 陸喜<sup>2)</sup>, 大平真理子<sup>3)</sup>, 石田 瞭<sup>1)</sup>

(東歯大・千病・摂食・嚥下リハ)<sup>1)</sup> (東歯大・解剖)<sup>2)</sup> (東歯大・クラウンブリッジ補綴)<sup>3)</sup>

**目的:** 東京歯科大学千葉病院では、平成20年7月に摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科を開設し、本年で3年が経過した。当科開設の目的のひとつに摂食・嚥下リハビリテーションを主体とした訪問診療を通じた地域医療連携の推進があったが、地域から依頼される訪問診療の件数は漸次増加し、歯科衛生士が訪問診療に参加する状況も確立されてきた。この3年間の当科の活動状況を振り返り、今後の方針について検討することを目的として、これまでの診察の状況をまとめた。

**方法:** 平成20年7月から平成23年7月までの初診患者377名 (男性205名, 女性172名, 年齢0歳~101歳, 平均年齢63.8歳) のリストをもとに、居住地、紹介元、診療形態 (外来/訪問)、基礎疾患について集計した。また診察したのべ患者数 (外来患者数/訪問患者数) を1年ごとに集計した。

**成績:** 対象者377名の居住地は千葉県内が94.7% (357名) で、うち千葉市内が48.7% (174名)、八千代市が12.9% (46名) であった。紹介元は院外58.9% (222名)、院内28.9% (109名) であり、院外のうち医科が73.0% (162名)、歯科が9.9% (20名)

であった。診療形態は外来58.1% (219名)、訪問診療41.9% (158名) であった。基礎疾患は脳血管障害が38.5% (145名) で最も多く、次いで口腔癌19.4% (73名)、発達障害11.7% (44名) の順であった。診察した延べ患者数 (外来患者数/訪問患者数) は、開設から1年目、2年目および3年目でそれぞれ849名 (509名/340名)、1,263名 (506名/757名)、1,557名 (659名/898名) で、訪問診療の件数が増加し、外来でも病棟での診察が増加した。また3年目には歯科衛生士の訪問診療への参加も開始し、1年間で79件の訪問診療を担当した。

**考察:** 増加する脳血管障害などに起因する摂食・嚥下障害に対して、歯科が在宅において安全かつ適切に対応することは、ますますニーズが高まっているといっても過言ではない。病院歯科である当科は、地域の歯科医師、研修医および歯科衛生士の教育も行いつつ、積極的にそのような地域の要求に応えていかなければならないと考える。さらに外来においては口腔癌患者へのアプローチを更に発展させ、患者のQOLの向上に寄与する必要があると考える。